



南塘だより

発行：弘大病院広報委員会

(委員長：伊藤悦朗副院長)

〒036-8563 弘前市本町5-3

TEL：0172-33-5111 (代表)

FAX：0172-39-5189

http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

※南塘とは、弘前市史によると医学部敷地内にあった南瀬池のことをいう。

2019年(令和元年)9月20日

病院長からの一言 Good Job !

弘前大学医学部
附属病院長 福田 眞作



医学・医療の進歩に伴って我々の日々の診療は複雑化を極め、検査や治療に多職種の職員が関わらないと、つまりチームでないと診療が成立しないようになっていきます。従って、チーム内のコミュニケーションが極めて重要であることは、今更言うまでもありません。日々、大きな医療事故につながりかねないインシデントは、大小問わず多くの病院で発生しており、その先にある医療事故を未然に防

げるかどうかは、チーム内で疑問に思ったことを気軽に口にできること、そして言われた当事者がその声を素直に聞き入れることができるかにかかっています。「インシデントレポートの多い病院は、危ない病院」と一般の方に誤解されることがあります。逆です。ヒアリングやインシデントをきちんと報告することで職場の医療安全の意識が醸成される、すなわち「インシデントレポートの多い病



院は安全な病院」なのです。

本学・本院には、〇〇学術賞や△△奨励賞など、医学研究に関する業績をあげた研究者や団体を表彰する制度がありますが、当然のことながら優れた功績をあげた方しか受賞できません。では、職員のキラッと光る現場での診療行為は、表彰に値しないのでしょ



か？ そんなことはないという思いで、病院職員を対象とした新たな賞を2つ、Good Approach賞とGood Job賞を創設しました。医事課職員がその名付け親です。インシデントレポートが多かった部署、部門にGood Approach賞を、そしてコミュニケーションを通して医療事故を未然に防いだ個

人、団体にGood Job賞を授与させていただきました。インシデントレポートの入力は通常の勤務時間外にされることが多く、入力する当事者の精神的な負担も小さくありません。また、「いつもと何か違う」、「前回とどこか異なる」といったプロならではの「感覚」や「違和感」、それを気軽に言葉にして他職種の相手に問うことも言うほど簡単ではありません。このような賞を契機に、風通しの良い職場、結果として患者さんに安全な医療を提供できるような職場を、多職種の皆さんで作っていただきたいと思っています。

ハイブリッド手術室の稼働とTAVI実施に向けて

2019年6月より、外来診療棟5階に設置されたハイブリッド手術室が稼働致しました。“ハイブリッド”の意味は、異なるものの組み合わせにより新しいものを作り出すことであり、従来別々にあった手術室と血管造影室を組み合わせた新しいタイプの手術室が稼働したことになります。最新の設備を備えつつも、やわらかくあたたかいピンクの色調の手術室は、患者側として医療側にも安らぎと安心感を与えてくれます。既に心臓血管外科や脳神経外科での血管内治療ならびに当科でのペースメーカーや除細動器植込み術が実施されていますが、ここでは今後当科で実施予定のカテーテルによ

る大動脈弁留置(TAVI)について、ご紹介致します。

弁膜症などの従来は心臓手術のみが治療法であった疾患(構造的疾患)に対して、カテーテルによる低侵襲治療が実施されるようになりました。例えば、超高齢者あるいは何らかの合併症を有する大動脈弁狭窄症患者は開胸手術のハイリスクに該当しますが、開胸不要のカテーテルによるTAVIが可能になります。TAVIの実施には、循環器内科医だけでなく心臓外科医、麻酔科医、看護師、放射線技師、臨床工学技士、臨床検査技師など、多職種によるチーム医療が不可欠です。従来からのハートチームに加え、TAVI実施に特化

したTAVIチームを発足させ、本年11月頃の開始に向けて準備を加速しています。超高齢社会を迎え、大動脈弁狭窄症の患者は益々増加しており、青森県では1万人前後の患者数が推定されています。また、実施前ではありますが、近隣の医療機関からも患者が紹介されるようになり、この治療法への期待の高さがうかがい知れます。今後もハイブリッド手術室を十分に活用しながら最新のカテーテル治療を導入し、当科そしてチームが一丸となって安全かつ最新の医療を地域の皆様に届けていく所存です。最後に、ハイブリッド手術室稼働に向けてご尽力いただきました全ての皆様に、こ

の場を借りて深く感謝申し上げますとともに、今後とも御指導・御鞭撻いただきますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

(循環器腎臓内科学講座 教授 富田泰史)

新任科長の自己紹介

放射線診断科科长 掛田 伸吾

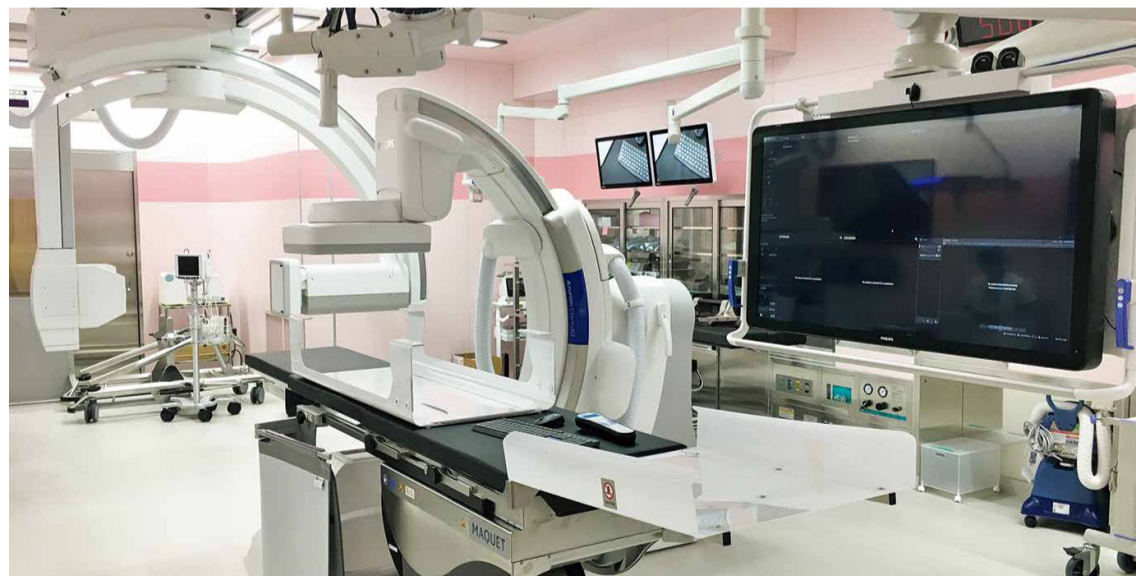


令和元年7月1日付けで放射線診断科科长を拝命いたしました。自己紹介を兼ねて就任の挨拶を申し上げます。

私は、弘前市民となるまで雪と無縁の福岡県で暮らしてきました。小説「青春の門」で知られる筑豊炭田がある田川市で生まれ、県内の中高一貫校を卒業し、北九州市にある産業医科大学に進学しました。北九州市は、八幡製鉄所やTOTO株式会社などがある工業都市で、競輪・パンチパーマ・焼きうどん発祥の地としても知られています。産業医科大学は、労働者の健康増進を目的に創立され、最近話題の「働き方改革」のバイオニア的な存在でもあります。このため大学時代は、医学部のカリキュラムに加えて、労働環境学など産業医学についても学びました。卒業後は、同大学の放射線科学教室に入局し、画像診断とIVR(画像下治療)を専門に診療を行ってきました。画像診断では、画像情報を各臨床科へ提供するだけでなく、高分解能MR画像や手術支援画像など最新の診断技術の導入も積極的に行ってきました。修練

医時代は、IVR医が少なかったこともあり、救急疾患や腫瘍の動注療法など多くのIVRを経験する機会に恵まれました。この経験は、画像診断においても相乗効果となり、今では私の財産です。修業時代より、画像検査の質と安全、低侵襲性を追求するとともに、「顔の見える放射線診断医」を信条としてきました。今後も、カンファレンスやベッドサイド診療に積極的に関わり、気軽に相談いただける診療科でありたいと思います。

赴任後もまもなく弘前大学として「ねぶたまつり」に参加しました。その道中の歓声の中、弘前大学医学部附属病院が地元の方々に深く愛されていることを知りました。放射線診断科は、若い医師も多く、地域医療に貢献できる多くの可能性を秘めています。厳しい冬も経験しながら地道に歩みを進め、広い裾野を持った岩木山のように皆さんに愛される診療科を目指したいと思っています。これからもご指導、ご支援を賜るようお願い申し上げます。



ハイブリッド手術室

数年来の懸案であった病院再開発について、この原稿を執筆時点で設計上の詰めのヒアリングを行っているところです。狭隘で高低差があり、しかも一部史跡に指定された敷地で、高層化も都市計画の上まならない制約された中で本格的に始動しました。建設により不足する代替駐車場も旧水道部敷地の借用によりどうにかカバーできそうです。

今後、再開発計画を進める上で病院経営の継続的安定は欠かせません。今年度の診療報酬請求額の

目標は、ハイブリッド手術室の稼働等を見込み前年度比6億円増の221億円に設定しました。手術室が本格稼働した6月の診療報酬請求額は初めて19億円を超え最高額を記録すると、7月には20億円を超えあっさり記録を更新。このペースでいけば年間230億円超はほぼ確実です(医療費の100億円超も確実です)。

本院に限らず全ての国立大学病院は法人化以降、あらゆる方策を講じ増収に努めているようです。法人化直後の平成16年度にお

先憂後楽

病院再開発と病院経営



参事役(病院再開発担当) 太田 修造

る全国国立大学病院の診療収入額は6,150億円だったものが平成28年度には1兆620億円と約1.7倍になりました。本院も同様であり、増収に伴い職員数も約1.5倍に増加しています。

一方、国民医療費を同じ時期と比較すると約32兆円から約42兆円と約1.3倍で、国立大学病院のシェアは1.4%から2.1%に拡大しています。余談ですが、国民医療費の財源別では、公費国庫負担と保険料は国民医療費の伸びに比例していますが、地方負担が

1.8倍で患者負担は横ばいなのはなぜでしょうか？

国の政策として、医療機関の機能分化など病床数削減の方向に動いています。本院もいずれ規模を縮小しなければいけない時期が来ますが、個人的にそれは十数年後と考えています。

しかし、もっと早い時期に、大学病院は儲けすぎと横やりが入るような診療報酬改定が…ということが杞憂に終わればよいのですが。

外科手術体験セミナー in 五所川原を開催して



去る6月29日、つがる西北五広域連合つがる総合病院を会場として「高校生を対象とした外科手術体験セミナー in 五所川原」を開催いたしました。今回は五所川原

高校、五所川原第一高校、弘前高校、八戸高校、田名部高校、三本木高校から56名の高校生が参加、スタッフは医師・研修医58名に加えて、医学生15名、協力企業関係者と看護師を含めて総勢90名を超える皆さんにボランティアで参加いただきました。開会式では五所川原市を代表して佐々木孝昌市長からもご挨拶をいただきました。今回は7つのブースを用意しましたが、いずれのブースも活気にあふれていました。ロボット手術のシミュレーターコーナーや人体モデルを使ってのスーチャリングコーナーなど、医師とマンツーマンでの手技体験もあれば、内視鏡外科手術コーナーなどのチームでの手術体験もあります。

プログラムの後半は、研修医、医学生の皆さんが中心になって高校生の指導にあたりました。教える側も教わる側も程よい緊張感があり、見ている方も微笑ましい感じがします。高校生にとっては身近

な目標である研修医や医学生の皆さんとのちょっとした会話が、良い刺激になるようです。4時間に及びセミナーは、修了証書の授与、そして自動縫合器を使う際の合言葉「ファイヤー」の掛け声で終了となりました。

この外科手術体験セミナーを最初に企画してから、今年で11年目(12回目の開催)を迎えました。昨年は弘前大学より、本セミナーの開催・継続が医学部および地域社会への貢献に値するとの趣旨で、「弘前大学表彰」をいただきました。今回もセミナーを開催するにあたり、形成外科学講座、胸部心臓血管外科学講座をはじめ多数の先生方、五所川原市のスタッフのみならずご協力いただいております。心から感謝申し上げます。このセミナー参加者から多数の医学生が誕生することを願っております。

(消化器外科学講座 坂本義之)

七夕・納涼祭り



【七夕飾り】
7月1日から8日まで、正面玄関の一角に七夕の笹竹を用意しました。

ボランティアさんから提供いただいた笹竹は青々とした立派なもので、四季を感じる機会が少ない病院内ですが、夏の訪れを感じていただけたことと思います。

今年も思い思いの願い事を込めた数多くの短冊を飾っていただきました。患者さんやそのご家族と思われる方々の願いが込められた短冊は胸に響いてきます。そして、その願いが天に届き、叶いますようにと願っています。

【納涼祭り】

7月25日午後4時15分から、正面玄関横で「納涼祭り」を開催しました。

この時期の弘前では毎日のようにあちらこちらで「宵宮」が行われていますが、入院中の患者さんにもご家族やお友だちと一緒に「宵宮」のような雰囲気味わっていただきたいと思います。



「ヨーヨーつり」、「スーパーボール・光りものすくい」、「千本つり」、「釣りゲーム」などを用意しました。

まず、光るうちわかキャラクターの扇子、光る腕輪を手にしてから、色とりどりの風船を選んで持っていただき、思い思いのゲームの場所へ。ヨーヨーつりやスーパーボール・光る金魚すくいでは、何回も挑戦している様子、また、千本つりでは狙った景品を見事に当てた時のうれしそうな表情が印象的でした。

当日は、小林看護部長、川村事務部長が弘前大学の法被を着て患者さん達と一緒にゲームを行い、祭りを盛り上げていただきました。

運営に協賛してくださった団体や企業、また、準備・運営・後片付けに協力してくださったスタッフの皆さんには、この場を借りてお礼申し上げます。(医事課)

令和元年度「みんなで知ろう!がんフェスティバル」を開催



去る8月18日に、土手町コミュニティパークにおいて「令和元年度みんなで知ろう!がんフェスティバル~これが『わたし』~」を開催しました。このイベントは、がんの正しい知識を市民の皆様にわかりやすく提供することを目的に行われ、今年も延べ300人を超える多くの方々にお越し頂きました。

今回はメインプログラムとしてウォーキングの仕方、お金の話、食事の工夫、在宅、こころについ

てなど、多種多様なテーマのプチセミナーを開催し、医療・福祉職から15分程度の講話を頂きました。プチセミナーに参加された皆様もそれぞれご自身が興味のある回に参加し、熱心に情報収集されていました。

他にも、患者団体や行政、医療・福祉、企業など多くのブースが出展し、活動内容の紹介やがんの療養や生活をしやすいするための工夫など、それぞれ特色ある情報を提供していました。また、超音波体験や白衣体験などの体験コーナーは今年も好評で、他にも、減塩だしの試飲や栄養補助食品の試食なども大変盛況となっておりました。参加者の皆様も資料をもらったり、医療に関する体験をしたりと楽しく参加されている様子でした。

また、会場内を巡りながら楽し

くがんについて学べるよう、今年は新たにクイズラリーを行いました。これはブースを巡ってがんに関するクイズに答える企画で、全問正解者と体験コーナーを3つ以上体験した方には「がん情報マイスター認定証」と景品をお渡ししました。皆さん楽しそうに参加されているのがとても印象的でした。

イベント全体を通して、参加者の皆様からも「がんについて知らないことを多く知ることができた」「いろいろな工夫されていて楽しかった」などの感想があり、大変好評でした。また、当院スタッフだけではなく、地域の医療機関の皆様からも多大な支援をいただきました。この場をお借りし、がんフェスティバルへ関わって下さった皆様に深く感謝申し上げます。

(腫瘍センターがん相談支援室)

この人 No.10



がん化学療法看護認定看護師
栗津 朱美さん

本院の多方面で働くスタッフを紹介いたします。

本院初の「がん化学療法看護認定看護師」として外来化学療法室で活動している栗津朱美さんについて、ご紹介いたします。

栗津さんは誰に対してもユーモアを兼ね備えスマートに対応ができ、患者さん・ご家族は勿論のこと、多職種間のコミュニケーションが抜群で、職場には常にいい風が吹いています。

印象的事象では、入院治療中の患者さんが栗津さんを頼り、栗津さんの時間的余裕のある時をめぐらして外来化学療法室に通っておられました。食事や副作用の相談、治療経過や何気ない普段の会話でも患者さんは気が済むまで話し、心を開いていた姿は今でも忘れられません。傾聴の姿勢と相談への的確なアドバイスが実践されていました。

看護部内では、がん看護実践者育成プログラムの講師を担当し、がん看護に携わる看護師育成の他、各部署勉強会の講師、相談依頼に対応し、毎日忙しく活動しています。まさに認定看護師に求められている3つの役割「実践」「指導」「相談」を果たしていると言えます。

些細なことでも是非一度がん化学療法認定看護師に相談してみてください。きっと素敵なアドバイスが受けられる筈です。

(外来担当・外来化学療法室担当看護師長 對馬雅子)

各診療科等の紹介

【皮膚科】



患者です。腫瘍切除、再建手術に加え、早期リンパ節転移を発見するためのセンチネルリンパ節生検も積極的に行っています。また、進行期悪性腫瘍に対する化学療法や放射線治療のための入院も多いです。

皮膚科診療はこの数年で大きく変化してきており、代表的なところでは、重症アトピー性皮膚炎や乾癬、悪性黒色腫に対する新薬登場が挙げられます。それらの恩恵で、10年前には想像もできなかったような、難治性疾患の症状改善とQOL向上が得られ、進行期黒色腫患者が長期生存できるようになりました。一方で、新薬による

特殊な副作用の管理に追われるという事態も生じており、副作用管理の点で多くの診療科にお世話になっております。院内の各診療科、各診療部門のご協力がなければ当科の診療は成り立ちません。この場をお借りして感謝申し上げますとともに、患者さんに質の高い医療を提供できるよう、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

(皮膚科学講座 助教 六戸大樹)

弘前ねぶたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぶたまつり」が8月1日から7日間行われました。弘前大学のねぶたも大学と地域住民との交流を図ることを目的として、1日、5日、6日の3日間参加し、昭和39年に初参加以来、連続56年の出陣を果たしました。

1日には、附属病院外来診療棟正面駐車場において、小児科に入院中の子ども達や保護者、医師、看護師、事務職員等による「小型ねぶた」が運行されました。本学はやしサークル「弘前大学囃子組」



等による太鼓と笛の音にあわせて、子供達は「ヤーヤドー」と元気の掛け声を響かせ、津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。(総務課)

【編集後記】

南塘だより第95号をおとどけします。原稿をお寄せいただきました皆様には、心から感謝申し上げます。

新年号の令和の初めての夏も終わりましたが、皆様はこの夏をどのようにお過ごしてましたか。例年であれば「弘前ねぶた」の期間中に一度位は雨が降りますが、今年は好天続きで農作物への影響が心配される程でした。

さて、「働き方改革」…、皆様はきちんと夏休みはとりましたか。きちんと就業時間管理表は提出しましたか。きちんと打刻はしましたか…。自分に関しては、打刻を時々忘れてしまいます。まだまだ、きちんと習慣になっていません。出来れば打刻だけで就業時間管理表の記載を不要にするのが理想ですが、まだまだ道は遠そうです。

(病院広報委員会委員 松原 篤)